

教師ができる不登校の子どもたちへのよりよい支援の在り方

－ 教育相談室から見えてくる子どもたちの実態 －

カウンセラー研修員 猫橋 則文(川崎市立南生田中学校)

I 主題設定の理由

学校が直面する様々な課題の一つに「不登校」の子どもへの指導・支援がある。「不登校児童生徒」とは、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいは登校したくともできない状況にあるため年間 30 日以上欠席した者(後略)」(学校基本調査)と定義される。そのため教師は生徒がいったん不登校になってしまった場合、その生徒に接する機会が減ってしまうことは避けられない。教師は家庭訪問、電話連絡、保護者との連携など、可能な限り接触を試みるが、不登校の生徒たちの実態を把握することは難しい。そこで、教育相談センターの相談室に来室してくる子どもたちが、いかなる理由で学校へ行けなくなったのか、今何を考え、思っているのかなど、子どもたちの実態を心理の専門家の視点から、少しでも把握したいと考えている。そして、より確かな生徒理解の方策や課題を抱えている子どもたちへの接し方などを習得し、教師ができる支援や指導法を探り、そして学校全体のチーム支援を意識した指導体制の見直しを図っていきたいと考え、上記のような主題を設定した。

II 研究の内容

1 不登校の状況

(1) 平成 17 年度の調査から

川崎市の調査によれば、平成 17(2005)年度の中学校不登校者数は、1,169 人で、出現率は 4.69% (21 人に 1 人) である。調査を開始した平成 3 (1991)年度以来、出現率は増え続けているが、ここ数年間は微増でとどまっている。

(2) 中学校からみた不登校の子どもたちの状況

私の勤務校の平成 17(2005)年度の調査では、出現率は 3.7% (27 人に 1 人) であり、市の調査とほぼ同じである。しかし、年度によって大きく変動する学校単位の調査では、数字だけで不登校生徒の全体像をつかめるとは言えない。そこで、一人一人の不登校生徒の状況を見ていながら、それぞれ抱えている課題等を検討していきたいと思う。

①不登校生徒の状況

私の勤務校のケースで不登校の主な理由は次の通りである。

<環境の影響によるもの>

- ・夜遅く寝て、朝起きられないなど、生活習慣が乱れている。
- ・保護者とうまくいかない。意見が合わない。構ってもらえない。
- ・家庭の都合。
- ・学校の友人とのトラブルが起こる。
- ・部活動の仲間からいじめられた。また、いじめたことによって仲間はずれにされた。
- ・学校で勉強する意義が感じられない。

<生徒自身の性格・気質によるもの>

- ・体の不調（腹痛、頭痛）を訴える。
- ・強い不安を感じるようになったり、何事に対しても無気力である。
- ・学校生活のペースについていけない。
- ・自分の好きなことに熱中する。
- ・自分の部屋（家）からなかなか外へ行けない。

これらの理由は主に教師の見方であり、もちろん複合的な理由を抱えているケースがほとんどである。次に、教師が行う不登校生徒へのコンタクトの取り方は次の通りである。

<ほとんど登校できず家にこもりっきりの生徒のケース>

保護者の了解を得て、家庭訪問や電話連絡で本人とコンタクトをとる。その際、教師は無理に面会をしようとはせず、本人の意志を第一に考えていく。それでも、直接面会または話ができない場合は、手紙などを書き置きしていくなど、本人との関係を保とうと努める。

<登校することもあるが休む方が多い生徒のケース>

教師は登校した時を支援のチャンスととらえる。休み時間や放課後の時間を見計らって、話す機会を作る。また、その生徒に関わりのある友人や他の教師（部活顧問、養護教諭、教科担任等）からの情報を得る。

<明らかに無理をして登校しているのではと思われる生徒のケース>

教師は慎重にその生徒にコンタクトをとる。他の先生の見方や情報を生かしながら教育相談を試みるが、このケースは保護者との連絡を密にしながら支援策を考える。

②校内生徒指導研修会から

毎年、10月の研修会では「現在抱えている課題」についてテーマを設けて研修会を実施している。本年度は「不登校の生徒とのより良いかかわり方について一家庭との連携を通して一」というテーマで、教育相談センター指導主事をアドバイザーとして、全教員で不登校の生徒について考えていった。そこで、この研修会を通して、学校からみえる不登校生徒の状況と支援策を考えることにした。

研修会の討議では、強い不安を感じるようになり、他人との接触を拒むケースに代表されるような「ひきこもりタイプ」の事例と、登校することもあるが家庭では親から構ってもらえず学校ではうまく友人関係を築けないケースに代表されるような「なんとなく不登校タイプ」の事例の2つのグループに分かれて検討した。各グループで討議された感想、状況、支援策等は次の通りである。

<ひきこもりタイプ>

- ・生徒と接する機会が極端に減り、教師が「心の病」としてとらえてしまい、難しく感じてしまう。
- ・専門機関でみてもらうように勧める。この場合、学校の教員にできることはかなり制限されてくる。
- ・両親の考え方のギャップがある場合、どのように埋めていくのかが非常に難しい。

<なんとなく不登校タイプ>

- ・生徒から話を聞ける状況であれば、積極的に会話を試みる。
- ・家庭訪問、電話連絡を通して生徒及び保護者との関係を築いていく。
- ・関係の生徒、教員などからの情報を集める。

次に、講師の先生のアドバイスを含め、学校の教師ができることを次のようにまとめてみた。

ア 生徒側に目を向け、生徒の行動や思いを想像（推測）する力を増やしていく。

イ 生徒と学校、家庭、地域との関係性の事前の情報をよく収集する。とくに中学校においては小学校での行動の様子等は貴重な支援の資源となる。

ウ 完全なひきこもりで生徒と面会もできない状態であれば、専門機関による支援が必要となってくる

る。その際、保護者の理解を得なければならないので、担任以外の教員の対応が大切である。
エ 学校の様々な活動や人間関係の中で、生徒が「信頼しているもの」「心のよりどころとしているもの」、つまり「つながっているもの」を複数の教師で把握し、確認をする。

とくに、その生徒が「つながっているもの」という部分に着目していきたい。

③事例から見えてくるもの

グループ討議の中で、「ひきこもりタイプ」と「なんとなく不登校タイプ」で、それぞれ一つずつ事例をあげて検討していった。その2つの事例を通して、生徒と学校が「つながっているもの」に視点を置いてみてみた。「ひきこもりタイプ」では、担任が定期的に面談を行い、その生徒の情感にふれるような関わり方をしてきたので、少しずつ意思表示ができるようになった。関わり方の一つに次の会話があった。なかなか自分の意志を表現できずにいた生徒が母親に「自分は高校へは行かない」と初めて自分の思いを語った。母親は進学希望が当然と考えていたのだが、その場にいた担任は母親の期待とは裏腹に「今、初めてあなたの考えを聞くことができうれしいよ」と応えた。それまで、担任はなんとかその生徒が自分のことを表現できないかと日頃考えながら接してきた。このケースの中に、ほんの一部ではあるが、学校（担任）との「つながり」が少し太くなってきていると考えられる。「なんとなく不登校タイプ」では、ベテランの担任が母親の子どもに対する姿勢等について支援をし、また担任がソフトボール部の顧問の立場としても生徒と接することができる。また、養護教諭が本人から内面的な話まで聴くことができる。今のところ、その生徒にとって、部活動や保健室で過ごす時間が心の居場所になり学校との「つながり」の部分と考えられる。

これら2つの事例を通して、一人一人の生徒にとって状況は違うが、その生徒を教員がしっかりと見ていくことで、少しではあるが前進していたことに気がついた。

（3）相談室から見える子どもたちの状況

1年間に教育相談センターに不登校を主訴とした新規の相談は約60件になる。そこで、今年度に入室してきたケースから見えてくるものとして、心理カウンセラーからの情報をもとに、次のようにまとめた。

①主訴が不登校のケースの傾向

- ・不登校のきっかけ（理由）がかなり多様化、複雑化している。
- ・頭痛、腹痛などの体調不良を訴えるケースが多い。また、病院にかかっているケースもある。
- ・離婚、親の病気など家庭内の問題を抱えているケースがある。
- ・なぜ登校できないのか、子どもも分からないと言っているケースがある。
- ・おとなしいタイプの子が多いが、学校生活に極度の緊張を強いられているケースがある。

②相談室ができる不登校の子どもへの支援

- ・子どもの生育、家族性、家庭環境等の情報を得やすい。
- ・子どもの内面的な部分を知る機会が多い。
- ・不登校の要因を家族関係から分析することができる。
- ・入室してきた子どもとのプレイを通して、子どもの行動傾向を観察し、自己表現の育成など、生きていくための活力を与えることができる。
- ・親や子どもの目から見た学校での出来事や学校の対応などを客観的に知ることができる。
- ・親や子どものペースで相談を行うので、中学校の3年間という限られた期間だけでなく、長期に子どもの様子を知ることができる。
- ・子どもと親の担当を分けて相談を進めることによって包括的にみることができる。

2 研修から学んだこと

(1) カウンセリングの考え方

事例会議に参加して感じたことは、様々な悩みや心に傷を負った子どもまたは親が多いことである。主訴は、不登校、友人関係、いじめ、生活習慣の乱れ、情緒不安定、母子分離不安、性格、家庭内暴力など様々あり、複合しているものも多くある。会議の中では、まずカウンセラーから子どもの生育歴や家庭環境など細かく報告が行われ、教育相談センターのスタッフであらゆる側面から課題を見つめ、意見交換がされる。また、スーパーバイザーとして招かれた講師の専門的な検討が加えられ、一つの事例を通して、より良い対処の仕方、話し方、今後の相談の方針が検討される。

この会議に参加して、とくに親の悩みの深さと子どもを取り巻く環境の複雑さに驚かされた。学校ではあまり見えない家庭環境や親の生育や気質などにもふれたり、プレイを通して見える子どもの内面まで検討していくなど、専門家の鋭い洞察力、観察力、推測力を感ずることができ、学校の現場とは違った研修をすることができた。

(2) カウンセリング技法・実習（プレイセラピーを通して）

今回のカウンセラー研修の中で、印象に残ったものはプレイセラピーを実際に経験したことである。プレイセラピーとは、遊具があるプレイルームでの遊び（プレイ）を通して行われる心理療法である。遊びによって子どもが持っている不満や不安を解消し、子どもの潜在的な力を尊重し人格の成長や変容を目指す。遊びのもつ性質を十分に引き出すためのセラピスト（カウンセラー）の姿勢について、アクスライン（1998）が提唱した原理をもとに8点考えてみた。

- 1 子どもと温かい友好的な関係をつくる。
- 2 あるがままの姿の子どもを受容する。
- 3 子どもとの関係で、許容的な感情をつくり出すようにする。
- 4 子どもの感情を敏感に察知し、これらの感情を子ども自身に気づかせる。
- 5 子どもに自分自身の問題を解決する機会を与える。
- 6 子どもの行動や会話に指示を与えることのないようにする。子どもがリードをとっていく。
- 7 治療は徐々に進歩する過程であり、治療を早くしようなどとはしない。
- 8 子どもに必要な制限を与える。

以上の8点を意識して行っていくわけだが、心理学を専門としない学校の教員がすぐに実践に移すのは困難である。そこで、親担当のカウンセラーから非常に分かりやすく的確なアドバイスを頂いた。とくに、上記の2番と6番を意識して実践していけばいいのでは、と教えられた。つまり、プレイルームの50分間は子ども自身がプレイの内容を決めることができる。そこで、セラピスト（カウンセラー）は子どものあるがままの姿を受け入れて、それをサポートする姿勢が求められる。

実際に子どもの相談担当として対応したことをまとめてみた。7月から月2回のペースで面談を開始した。初めて子どもに会ったときの印象は、あいさつがしっかりできていて、礼儀正しい感じがした。毎回、最初の10分間はいすに座って話をして、その後は自分で決めた遊びをするようにした。プレイ中はその遊びに夢中になり、また私に対して気を使う場面も見られた。このような同じ遊びを11月頃まで繰り返していたが、12月に入るとその遊びを選ばなくなり、トランポリンやハンモックでくつろぐことが多くなった。私はここでは相談者として、子どもに接してきたが、11月頃までの同じ遊びをしている姿が、「子どものあるがままの姿」ではないのではという疑問を、最近持ち始めた。12

月に入ってから、プレイルームでごろごろしながら、自分のことを少し語り始めた姿が、自分を表出した部分なのではと思いはじめた。そのときの私の格好を振り返ってみると、私も床にあぐらをかいしたり、バスケットのシューティングなど他のことをしながら子どもの話を聴いていたように思える。子どもも私も自然な形で、お互いありのままの自分を出しながら話しができてはじめてなのではと感じた。平木（2004）が「カウンセラーという役割や枠組みにとらわれてそこでのみ行動したとしたら、それはカウンセラー的行動ではあっても、カウンセラーの行動ではない」「カウンセラーは、裸で相手と付き合えるだけの純粹さや自由さ、自然さを持っていることが大切なのである」と指摘することが、少しではあるが実践を通して感じとることができた。

（3）援助チームの考え方と演習—学校心理学の視点から—

教育相談に関する研修として、いくつか体験をした。その中で、印象に残った研修は、「援助チームの考え方と演習」である。日頃、校内では生徒指導担当として生徒指導全般に関わる立場としてとても参考になった。チーム援助とは「複数の援助者が、共通の目標を持って、役割分担をしながら子どもの援助にあたること」で、一人一人の子どもの問題状況の解決と子どもの成長を目指す心理教育的援助サービスを視点を置く。演習では四人一組のペアになり、それぞれ保護者、担任、養護教諭、学年主任の役割を決める。そして与えられた事例に基づいて、話を進めていく。限られた時間でかつ共通の目標を持ち、しかもお互い生徒への対応策が一步でも前進するという充足感を味わわなければならぬ。その中で、会を進行する人の進め方の力量も試される。実際に会を進める立場に頻繁になる生徒指導担当がこの技法を身につけたとしたら、校務多忙の学校現場においては、とても効果があるのではないかと思った。私自身、この研修を受けてから、実際の学校現場で意識的に取り組んでみた。全ては思い通りにはならなかったが、子どもを複数の目で多角的に見ていくことの大切さを実践を通して感じることもできた。

3 一人一人の子どもたちへのよりよい支援について

不登校の要因は様々あるが、「学校に行く」ということに対して何らかの障害が生じていて、とくに不登校のなり始めは、子どもが精神的に疲れている状態であることは確かである。その精神的な疲れを周囲の大人たちがいち早くキャッチし、その子どもにとってどんな課題を示しているのか、どんな方向がその子どもにとって意味を持つのかを考えていく必要がある。

（1）不登校の子どもたちの気持ち（相談室の子どもたちから見えてくるもの）

相談室のカウンセラーは実際に不登校を理由に来室してくる子どもたちに接するとき、「なぜ学校へいけないのか」「学校に行けるにはどうしたらいいのか」などダイレクトに聞くことはしない。むしろ、相談室をかつての「学校は行かなければならないところ」という社会通念とは離れたところに置いて相談を進めているように思う。子どもたちは、自分で決めたことを自由に表現できる機会を与えられ、それでも躊躇している子どもには、カウンセラーがポンと背中を押してくれるような感じで後押ししてくれる。すべてではないが、心に傷を持ってくる子どもたちは、精神的な疲れをとるだけの十分な休養をとり、ときには意思表示ができるようになったり、意見が言えるようになったりするなど、自信をつけさせてもらい、元気を回復していく。つまり、相談室では、子どもが学校に行くための力を内面的な部分からつけさせる役割があると考えられる。

（2）学校ができる支援・指導法

不登校の生徒にとって学校との「つながり」はどういうものがあり、いくつあるのか、太いのか細いのか、を見ていくことが重要である。「つながり」とは、たとえば、授業（学習）、部活動、委員

会、行事、友人、教師、規範、習慣において学校で自分を表現できる場のことを言うが、それらをトータルして見極めていかなければならない。そのためには、担任だけではなく複数の大人の支援が必要である。そこで、前に述べたように、チーム援助の方法を導入し、その生徒の持っているよい資源を探っていく。細い「つながり」であるならば太くさせ、薄い色ならば濃い色にし、少なかったら増やすことを共通の目標に据え、チームで援助していく。その手だてとして次のようにまとめた。

- ・日頃から一人一人の生徒が自分を表現できてそれを実感できるものは何かを把握しておく。
- ・不登校になりかけの時期に、早急に支援できる体制を作る。（チーム援助）
- ・計画的にその生徒への具体的な支援を積極的に行っていく。
- ・学習支援を含め特別支援体制との連携を強化していく。

(3) まとめ

私自身、学校では見えない子どもの状況を相談室の活動を通して見えたり感じたりすることができた。とくに相談活動を通して、子どもがありのままの姿を表出できる接し方があることに気がついた。そのことから、学校においても、教師の視点を少し違った角度におき、より深く気持ちにふれるように生徒と接する工夫が必要であると感じた。そして、様々な役割をもつ教師が、ありのままの子どもの姿の中から、一人一人の生徒について学校と「つながっているもの」を見だし、複数の目で様々な側面から支援していくことが、不登校生徒の出現を未然に防ぐ手立てにもなると考えた。不登校になってしまったり、その兆候の見られたりする生徒にも、その生徒のもつ学校との「つながり」を修復させていくための段階的な目標を設定し、様々な立場や特性をもつ教師が、意識的に、また、積極的に働きかけることが有効な支援になると考える。

III 研究のまとめ

不登校は、どんな学校（学級）でも、どんな家庭でも、どんな子どもでも、起こりうるものである。よく、現代の不登校は、個人的な病理現象ではなく、社会現象であると言われることもある。「不登校の生徒がいない学校」。このことは教員であれば誰もが願うものである。社会状況が変化したとはいえ、以前と比べれば、学校の教員の支援・援助の仕方はかなりいいになり意識も高くなっていると思う。さらに、より良い支援の在り方について考えるのであれば、多面的に生徒の情報をもっている学校の教師が、その特性を最大限に生かすためにも、その生徒が向かう方向をしっかりと見極めていかなければならない。そして、支援する手だての共通の目標を持ち続けていけば、その生徒に適した支援・援助ができるのではないかと考える。

最後になりましたが、この研修の機会を与えていただいたことに感謝するとともに、ご指導ご助言をいただきました川崎市総合教育センターの皆様、南生田中学校の校長先生をはじめ学校職員の皆様に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

【参考文献】	アクスライン 東山紘久『遊戯療法の世界』創元社	1998年
	平木典子『カウンセリングの話』朝日新聞社	2004年

【指導助言者】	川崎市総合教育センター指導主事	山本 浩之
---------	-----------------	-------